



Title	今昔物語集震旦部の引用構造 夢語り・冥途語りを中心に
Author(s)	山口, 康子
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 35, pp.一一二; 1986
Issue Date	1986-03
URL	http://hdl.handle.net/10069/32954
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-20T03:10:57Z

今昔物語集震旦部の引用構造

——夢語り・冥途語りを中心に——

山口 康 子

一、
本稿は「今昔物語集天竺部の引用構造」(本研究報告第三十二号・昭58・3)における天竺部の考察に続いて、これにつぐ震旦部の引用構造の実態解明を目的とするものである。天竺部との比較を明確かつ有効なものにするため、まず先稿の方法に従って引用構造を検討し、加えて震旦部の特色に基づき新しい視点を導入したい。

天竺部と異なり、震旦部は、現在までに直接の依拠資料がかなり明らかにされている。巻六から巻十までの五巻のうち巻八を欠き、巻七の33から40までは原典から既にないものとみられ、総話数一七四話を数える。巻六・七「仏法」巻九「孝養」巻十「国史」の標題がおそらくは原典からついていて、巻六を除く巻七・九・十の三巻は鈴鹿本が存し、巻六にも古本系統の紅梅文庫旧蔵本・新宮城旧蔵本・野村本が存する。資料的に信頼性の高い部といえる。

震旦部の出典については、主な依拠資料として、三宝感応要略録・冥報記・弘誓法華伝・孝子伝の四書(いずれも中国渡来資料)と俊頼髓脳があげられ、依拠した伝本の素性も明らかにされ、誤訳や誤解の実態にも及ぶ相関関係の解明が精緻に行われている。^(注1)

今昔物語集震旦部の引用構造(山口)

その結果、震旦部の三分の二近くが中国系の資料に拠っていることは明らかである。しかし、出典文献の文章との関係については、今昔物語集には接統語・主格・目的格・指示語等の明示と多用による独特の文章展開が認められ、この点について小峯和明氏は、「依拠資料と今昔物語集とを明確に分別する文体の特徴を形作っている。」と述べておられる。しかもこの構文法が漢文訓読に限らず、和文資料に対してもみられることも考察された。^(注1)

とりわけ本稿にかかわりのある会話文において、主格や人称を明確にする方法や接統語・指示語による文の組み立てが仏典に基づくものとする考えも示され、「今昔物語集の文章が当時の口語体を反映するものでも、伝統的な文章語でもなく、漢文訓読法を基調とする新たに創出された『作られた文体』である」(筆者抄出)とされるが、この事は前に別の角度から拙稿にも述べたことがある。^(注2) 以上によって、今昔物語集の文体特徴を考えようとする時、依拠文献が明確であっても一応切り離して、独自のものとして考察することが許されよう。

二、

地の文の中に引用されている①直接話法会話文と②心中言とを合わせて「引用文」と呼び、引用文における会話文と心中言の比率を算出して表Ⅰに示すこと、先稿と同様の方法をとる。①会話文②心中言の認定の方法も先稿「天竺部の引用構造」(以下「先稿天竺論考」と略称する)に従う。先稿天竺論考における表Ⅰと対応する。以下も天竺部との比較のため先稿天竺論考との対応を明示する。

震旦部では引用文における心中言の比率が比較的高い。全引用文九二二例のうち会話文七〇五例、心中言二一七例で、その比率はおおよそ三対一である。天竺部においてはそれが六対一であったことを思えば、震旦部は心中言を記すことが多いのである。

表Ⅰ 引用文の内訳

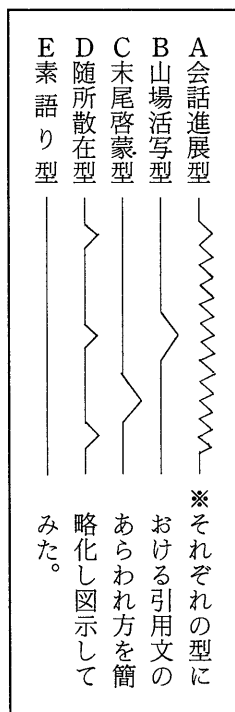
	引用文数	会話文数	心中言数	引用文数に対する心中言の比率
卷 6	203	133	70	34.48
卷 7	155	114	41	26.45
卷 9	245	206	39	15.91
卷 10	319	252	67	21.00
計	922	705	217	23.53

表Ⅰにみるとおり、震旦部各巻の心中言の比率に相当の開きがみられる。巻六の三割五分から巻九の一割六分までばらつきがある。心中言の比率の高い巻六は、夢語りが多いのである。多くの夢が「夢ニト見ル様」「夢ニ見ルニト見ル」のような形式で引用されている。後に語られたからこそ当人以外の者も知るようになり、今昔物語集の地の文自体が「今昔トナム語り伝ヘタルトヤ」で括られている「語り」であることは大前提(「先稿天竺論考」参照)であるが、文章表現上は引用動詞「見ル」を持ち、認識・知覚の内容として表現されているのであるから、これらの夢の引用は心中言とみなした。夢の引用は震旦部全体に及んでいて、このことが震旦部に心中言の多い最大の要因である。

以下、これらの引用文が各説話にどのように引用され、どのような表現効果をあげているか検討する。引用文の出現状況を見るために、各説話毎に冒頭から順次文番号123……を付し、すべての引用文にも出現の順に引用番号①②③……を付した。引用文の位置を文番号と引用番号の組み合わせによって示す。それを図示したものを「引用構造図」と呼ぶこと、先稿天竺論考と同じである。

三、

先に私は天竺部にみられる引用構造の型に五類型を見出し、それぞれ次のように名づけた。先稿天竺論考から転記する。



この五型によって天竺部一〜五巻の引用構造を説明することができるが、震旦部六〜十巻の場合もこの五類型で説明できるだろうか。この五型は実際に天竺部にみられた引用構造から帰納的に得られたものではあるが、引用文の出現状況として演繹的に考えても、一応の出現状況を尽くしていると考えられる。従って震旦部においても特別な変容はないと思われるが、話柄や内容と深いかわりのある問題であるから、震旦部の特徴はおのずとあらわれよう。

事実、震旦部においては、天竺部、特に巻二に顕著であったC末尾啓蒙型は見出し難く、又B山場活写型も典型的な形ではあらわれにくいようである。かわって見出されるのは、ある個人の特定の体験が長々と語られる引用の型であるが、説話末尾で人々を啓蒙するという内容ではなく、出現の場所も必ずしも一定しない。夢から悟めた人、又は蘇生した人が、見た夢の内容や冥府の様子を述べるものが多く、引用文自体が長大で内部に二重引用、三重引用の会話文を持つものが目立ち、引用文内部だけに閉じていえばA会話進展型になっているような引用構造である。この形で三世の因縁が語られることも多い。夢もしくは冥途の経験の絶対性は極めて強力であり、夢を見た人・冥府から蘇った人以外は口を

今昔物語集震旦部の引用構造(山口)

挿む余地はないが、その経験内容が絶対性を持つのであって、経験者その人には何ら絶対性はない。従って夢語り・冥途語りは救済にはなり得ず、改めて救済のための努力の方法やその結末が解説されるのが普通である。これはC末尾啓蒙型とは趣を異にする。ここに、第六番目の類型、F体験談話型を導入して、A〜Fの六類型で震旦部の引用構造を考えてゆきたい。

まず、新たに加えたF体験談話型について少し述べておこう。この型はB山場活写型、C末尾啓蒙型と同様に説話中の一箇所に引用文が集中する型であるが、その集中箇所は必ずしも山場とも末尾ともいえない。説話内容にとって動かし難い重要なポイントが引用文にある点ではB・C型と同じであるが、明らかに異なる性格も有する。B山場活写型のように複数の会話文の連続・継起ではなく、大むね単一の引用文の中に二重引用会話文が複数ひかれるという形をとる。その点はC末尾啓蒙型と通じるが、C末尾啓蒙型の引用文の語り手のように権威を持って啓蒙的に説話末尾で語るのではなく、F体験談話型の引用文の語り手は己れ自身も理解できないような不思議な体験を談話するのである。例についてみよう。

巻七 唐ノ高宗ノ代、書生書写大般若経語第二
 1 今昔、震旦ノ唐ノ高宗ノ代ニ、乾封元年ニ一人ノ書生有リ、身ニ重病ヲ受テ忽ニ死ヌ。2 一日ニ夜ヲ経テ活テ語テ云ク、①「我レ死シ時ニ、赤キ衣ヲ着タル冥官来テ文牒ヲ持テ我レヲ召ス。即チ、此ノ冥官ニ随テ行クニ、大ナル城ノ門ニ至ヌ。使者ノ云ク、④「城ノ内ノ大王ノ玉ハ、此レ、息諱ノ玉也。彼ノ文牒ヲ持テ汝ヲ召也」ト。我レヲ聞クニ、驚キ怖レテ我ガ身ヲ見レバ、右ノ手ニ大光明ヲ放テリ。其ノ

光、直二王ノ前ニ至ル。此ノ光、日月ノ光ニ過タリ。王、此レヲ見テ驚キ恠ムデ、座ヨリ起テ掌ヲ合セテ、光ヲ尋テ、此レヲ推シテ門ヲ出デ、我レヲ見給テ、問テ宣ハク、^⑧「汝ヂ、何ナル功德ヲ修シテ、右ノ手ヨリ光ヲ放テルゾ」ト。答テ云ク、^⑨「我レ、更ニ善根ヲ不修ズ、亦、光ヲ放テル故ヲ不悟ズ」ト。王、此レヲ聞テ、城ノ内ニ還リ入テ、一卷ノ書ヲ檢ヘテ亦、門ニ出デ、歡喜シテ我レニ語テ宣ハク、^⑩「汝ヂ、高宗ノ勅命ニ依テ大般若經十卷ヲ書写セリ。右ノ手ヲ以テ写シニ依テ其ノ手ニ光明有ル也」ト。我レ、此レヲ聞ク時ニ、其ノ事ヲ思ヒ出セリ。王ノ宣ハク、^⑪「我レ、汝ヲ放ツ。速ニ可還シ」ト。其ノ時ニ、我レ、王ニ申サク、^⑫「忽ニ来ツル道ヲ忘レタリ」ト。王ノ宣ハク、^⑬「汝ヂ光ヲ尋テ可還シ」ト。然レバ、王ノ教ヘニ随テ、光ヲ尋テ還ルニ、旧宅ニ近付ク。其ノ時ニ、光失セテ、我レ活ル事ヲ得タル也」ト語テ、涙ヲ流シテ泣キ悲ム。^⑭其ノ後、所有ノ財宝ヲ弃テ、大般若經百卷ヲ書写シ奉レリ。

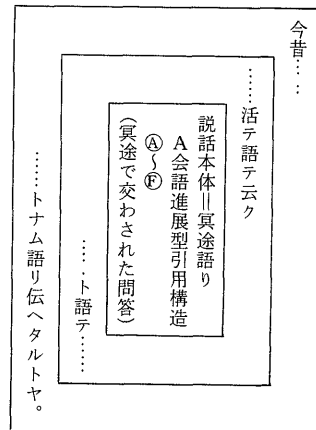
^⑮此レヲ以テ思フニ、国王ノ仰セニ依テ不意ニ一帙ヲ書ケル人ノ功德、猶シ如此シ。^⑯何況ヤ、心ヲ菴シテ一部ヲ書キタラム人ノ功德可思遣シトナム語り伝ヘタルトヤ。

卷七第二語の全文を文番号、引用番号を付した形で示した。印刷の都合上、宣命書きは行わない。この文番号と引用番号の組み合わせを图示して引用構造図1に示す。この説話では冒頭の人物紹介文の後、直ちにその主人公が語り始め、冥途の体験を^①〜^⑧の計七例の二重引用会話を連続的に引用しながら長々と語り続ける。語り終えたら後日の行動を記し教訓を添えて説話が終る。卷七第二語の説話内容は、書生の冥途語りに尽き、説話は、いわ

引用構造図1 卷7-2

文番号	引用番号
1	①-A-B-C-D-E-F-G
2	
3	
4	
5	

卷七第二語の説話構造



ば二重の額縁に縁取られて示されている(右図参照)。この二重の額縁はC末尾啓蒙型にも見られたが、C型の場合には命名どおり末尾に限られ、普通、後続文はない。

勿論F型においても、体験談話の引用文が末尾近くに出現することはあるが、それで説話が収斂することはない。例を示そう。

卷九 河南ノ元ノ大宝、死報告張ノ叡冊ノ夢語第十五
¹今昔、河南二元ノ大宝ト云フ人有ケリ。²貞観ノ間ニ、大理ノ丞トシテ有リ。³此ノ人、心ニ因果ヲ不信ズ。⁴亦、同僚ニ張ノ叡冊ト云フ人有ケリ。互ニ友トシテ契リ深シ。
⁵大宝常ニ叡冊ニ語テ云ク、^①「我等二人が中ニ、若シ、先キニ死ナム者ハ、将来ノ果報ノ善悪ヲ必ず示シ令知メヨ」ト契ル。⁶而ル間、大宝、貞観十一年ト云フ年、車ニシテ洛陽ニ行ク間、病ヲ受ケテ忽ニ死ヌ。⁷叡冊ハ京師ニ有テ、大宝ガ死セル事ヲ未ダ不知ズ。⁸而ル間、一夜、叡冊、夢ニ^②「大宝来テ告テ云ク、^③「我レ、既ニ死タリ。生タリシ時、善悪ノ報有ル事ヲ不信ザリキ。今、死テ後^④「定メテ善悪ノ報有ケリ」ト云フ事ヲ知ヌ。此ノ故ニ、我レ、来テ君ニ令

知シム。君、專ニ福業ヲ可修シ」ト。叡冊、夢ノ内ニ其ノ事ヲ委ク問フニ、大宝答テ云ク、^⑧「冥途ノ果報ノ事、極テ固クシテ具ニ不可宣ズ。只、君ニ告テ定テ報有リト云フ事ヲ令知シム許也」ト云フ」ト見テ、夢覺ヌ。^⑨其ノ後、叡冊、同僚ニ向テ此ノ夢ノ事ヲ語ルト云ヘドモ、実否ヲ難知キニ依テ、次ノ日行テ大宝ガ事ヲ問フニ、大宝既ニ死タル由ヲ知ヌ。

¹⁰然レバ、其ノ夢ノ告ヲ家ニ令尋問メケリ、^⑩「生タリシ時契リ深カリシ中ナレバ、死テ後モ不忘ズシテ、如此ク示ス志シ哀レ也」ト云テナム、叡冊、大宝ヲ恋ヒ悲ビケリトナム語り伝ヘタルトヤ。

卷九第十五語は引用構造図2にみるとおり全10文のうち末尾に近い第8文に叡冊の夢の引用があらわれ、内部に二重引用(A)⑧、更に(A)の内部に三重引用(1)が出現する。しかしそれで説話が終了することはなく、文番号9の「其ノ後」の行動と10の結末が「語り伝へ」られる必要があることを示している。

このような引用構造を持つ説話を、その変型・応用型も含めて、F体験談話型に分類し、先稿天竺論考で見出したA～Eの五類型とあわせて全六類型を用いて震旦部の引用構造を説明してゆく。この判断は、引用文の多寡のみならず、引用文の出現箇所と回数との相関性に加えて説話展開に果している引用文の機能という内容面も関与するので、数値だけでなく、分類結果を表IIに示す。先稿天竺論考の表IIに対応する。

A～Fの型の分布は、天竺部において巻毎に特色がみられたが、震旦部においても同様に巻毎の特色が著しい。大まかに把えてみよう。

引用構造図2 卷9—15

文番号	引用番号
1	
2	
3	
4	
5	①
6	
7	
8	②-A-①-B
9	
10	③

表II 震旦部における引用構造の型の分布表

	卷 6	卷 7	卷 9	卷 10	計
A	3、4、9、32 44、47、48	7、19、24、32	4、6、13、20 29、32、36、43 44、46	1、3、4、8 9、10、12、15 22、23、29、31 32、33、34、36	37 40
AF		5、8	30		3
B	1、2、22、43	1、6	11、12、45	5、13、19、20 21、24、28、30 35	18 20
BF	6	13			2
C	27			11	2 2
D	5、20、23、26 46	3、14、15、17 21、25、26、28 41、43、44	1、2、3、5 8、9、17、24 35、37、38、39 42	2、6、25、27	33 35
DB DF		46		7	1 1
E	7、8、14、16 24、28、30、42	11、16、18、27 29、45	7、10、21、23 26、40、41	16、17、18、26 37、38、39、40	28 28
F	10、11、12、13 15、17、18、19 21、25、29、31 33、34、35、36 37、38、39、40 41、45	2、4、9、12 22、23、30、31 42、48	14、16、19、22 25、27、28、33 34	14	42 48
FA FAD FB FD		20、47 10	31 18 15		6
計	48	40	46	40	174

表中各欄の数字は、説話番号を示す。
計の欄の数値は、合計話数である。

卷六―Fに集中、E・Aが次ぎ、B・Dが更に続いて、Cが最低。
 卷七―D・Fが並んで最高、Eが次ぎ、更にA・B最低、C皆無。
 卷九―Dが最高、A・Fが次ぎ、更にE、続いてB。Cは皆無。
 卷十―Aが最高、B・Eが次ぎ、更にDが続ぎ、C・Fは最低。
 右のとおり、各巻によって優位を占める引用構造が異なっている。特に興味深いのはF型の出現状態である。簡略に図示しよう。

	卷	最優位	第二位	第三位	最低位	皆無
十	A	B・E	D	C・F		
九	D	A・F	E	B	C	
七	D・F	[E]	A	B	C	
六	[F]	A・E	B・D	C		

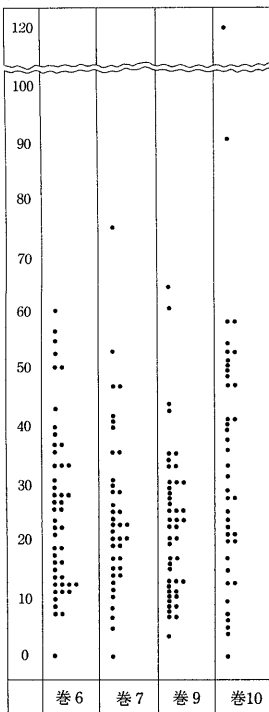
問題のF型を○で囲んだ。

出現の多寡を相対的に示したものであるが、F型の分布に特色があることがみてとれる。C型はいずれの巻でも少なく、この型が天竺部、特に卷二の特徴的な引用構造であったことが改めて想起される。又E素語り型がどの巻にもほぼ安定した位置を保ち、震旦部引用構造の一つの基調になっていることが分る。先稿天竺論考^(注5)にならって引用構造の型の巻別比率を表IIIに示す。先稿天竺論考表IIIに対応する。

F型は卷六ではほぼ半数という圧倒的な出現状況を示すが、卷七ではD随所散在型と並び、卷九ではD随所散在型・A会話進展型に押され、卷十では僅か一説話と激減し、A型が圧倒的になる。B・C型は、引用文の種類や出現箇所が異なるだけで引用構造としてはF型と同質であるから、B・C・Fの三型で一つの類型を成し、その内部分類という性格も持っている。このような巻による型の偏りは巻の内容と大きくかわるものである。更に、天竺部との比較のため、引用率の巻別分布図を示す。先

図A 引用率巻別分布図

表中の・は各話の引用率を示す。



稿天竺論考^(注6)表Aに対応する。黒点の位置によって各説話の引用率を示す。同率の説話が複数存在する場合は横並びに記した。引用構造の型だけではなく、引用率の分布にも巻毎に大きく特徴があることが分るが、これもF型の出現状況と大きく相関する。

表III 引用構造の型の巻別比率

	卷 6	卷 7	卷 9	卷 10	平均
A	14.58	10.00	21.74	40.00	21.26
A 変型		5.00	2.17		1.72
B	8.33	5.00	6.52	22.50	10.34
B 変型	2.08	2.50			1.15
C	2.08			2.50	1.15
C 変型					
D	10.42	27.50	28.26	10.00	18.97
D 変型		2.50		2.50	1.15
E	16.67	15.00	15.22	20.00	16.67
E 変型					
F	45.83	25.00	19.57	2.50	24.14
F 変型		7.50	6.52		3.45

四、

前項までの考察によつて、震旦部における引用構造の特色は、とりわけてF体験談話型にみられると思われる。この型は巻による偏在も甚だしく、巻六に極端な出現をみせた後次第に出現率を減じて巻十には僅かに一例のみをみることに前項のとおりである。F型においては体験談話の中心をなす大むね長文の引用文が最低一箇所は存するが、その体験の内容は夢体験か冥途体験であることが多い。夢にみた事、或いは冥途での体験を、悟めた後、蘇つた後に、その体験中の会話文を二重引用で豊富に引用しながら、あたかも眼前するが如くに生き生きと語っているのである。震旦部に特徴的な、この夢語り・冥途語りの実態を明らかにすることが、震旦部引用構造解明の手がかりになると思われる。

勿論、夢語り・冥途語りは、必ずF型引用構造の説話の中に現われるわけではない、その傾向が非常に強いということである。まず震旦部において、夢・冥途が語られている説話を全一七四話から抽出し、表IVとして示す。比喩として「夢ヲ見ルガ如クニ」(六三〇)のように用いられている例は除外した。実際に夢又は冥途が語られている説話に限る。

関係説話は、夢・関係43話55事例、(同一説話の中に複数の夢語りが出現する事例があるので話数と事例数は一致しない)。冥途関係40話44事例である。両者が重複するのは、七三・二三・三二・四七、九五・二二・二五・三二の計八話である。

これらの説話は引用構造の面からみる時、どのような型の分布を示すであろうか。次にそれを表Vとして示す。夢語りにおいて

今昔物語集震旦部の引用構造 (山口)

表V 夢語り・冥途語りの引用構造の型

型	巻							計
	A	B	C	D	E	F		
夢語り	6	3	3		2	1	16	25
	7	1	2		3		9	15
	9	4			1		7	12
	10	2					1	3
計	10 (18%)	5		6	1	33 (60%)	55	
冥途語り	6	1				1	11	13
	7	3			2		10	15
	9	4			1		11	16
	10							
計	8 (18%)			3	1	32 (72%)	44	

も冥途語りにおいてもF型への集中が著しく、夢語りで六割、冥途語りで七割強がF型の引用構造の中で語られている。

表IV 夢・冥途関係説話一覽

計	巻				計
	十	九	七	六	
43 (55)	3 (3)	② 3、 ③ 33、 (2) 16、 ④ 43、 ⑤ 44、 ⑥ 46	⑦ 12、 ⑧ 13、 ⑨ 20、 ⑩ 21、 ⑪ 22、 ⑫ 25、 ⑬ 28	⑭ 1、 ⑮ 2、 ⑯ 4、 ⑰ 5、 ⑱ 10	⑲ 2、 ⑳ 6、 ㉑ 13、 ㉒ 15、 ㉓ 23、 ㉔ 25、 ㉕ 28
		11 (12)	13 (15)	16 (25)	
40 (44)	13 (16)	① 27、 ② 28、 ③ 29、 ④ 30、 ⑤ 31	⑥ 2、 ⑦ 3、 ⑧ 8、 ⑨ 9、 ⑩ 19、 ⑪ 22	⑫ 11、 ⑬ 12、 ⑭ 17、 ⑮ 21、 ⑯ 24、 ⑰ 29	計
		14 (15)	13 (13)		

各欄の数字は、説話番号を示す。
○内の数字は、一話内に引用される事例数を示す。
○は、夢・冥途の両方に関係する説話の番号。
計の欄は、各々の説話数、()内は事例数を示す。

引用構造がF型に集中するだけでなく、夢語り・冥途語りにおいては、引用形式も極端に類型化している。夢・冥途を語る場合の語り口は、今昔物語集震旦部において極めて固定的である。基本的な形式があつて、その若干の変型と応用型に尽きる。冥途語りから用例を示そう。

卷六 張ノ居道、書写四卷経得活語第四十一

1 今昔、震旦ニ、温州ノ治中トシテ張ノ居道ト云フ人有ケリ。2 女子ノ事ニ依テ猪・羊・鵝・鴨等ヲ致ス。

3 其後、未ダ一句ヲ不経ル程ニ、居道、病ヲ受テ

4 三夜ヲ経テ **活テ**、**語テ**云ク、①「我レ、初メ死シ時、

見レバ、四人ノ人来レリ。懐ノ中ヨリ一張ノ文書ヲ抜き出

デ、居道ニ示シテ云ク、②「此レハ、汝ガ致セル所ノ猪・羊・

鵝・鴨等ノ同語訴ヘテ云ク、③「我等ハ、前身ニ罪造テ、今、

畜生ノ身ヲ受タリト云ヘドモ、命限有リ。而ルニ、居道ガ

為ニ非分ニ命ヲ被奪タリ」ト。此レニ依テ、汝ヲ召ス也」

ト云テ、打チ縛テ將去ル。一ツ道ヲ北ニ向テ行ク間、路ノ

中ニシテ、此ノ副ヘル使、我レニ云ク、④「汝ヂ、未ダ死ノ

期ニ不至ズ。何ナル方便ヲ以カ活ル事ヲ可得キ」ト。居道

ガ云ク、⑤「実ニ、自ラ致セル事ヲ思ヘバ、極テ難免シ」。

使ノ云ク、⑥「汝ヂ致セル所多シト云ヘドモ、其ノ致セル生

類ノ為ニ心ヲ赦シテ」⑦四卷ノ金光明経ヲ書写シ奉ラム」ト

願セバ免ル、事ヲ得テム」ト。居道、此ノ教ヘヲ聞テ、再

ビ、其ノ事ヲ唱フ。而間、遂ニ城ノ内ニ至ヌ。見レバ、廳

ノ前ニ无数億ノ罪人有リ、皆悲ミ痛ム。其ノ音ヲ聞クニ、

居道恐テ怖ル、事无限シ。其ノ時ニ、使、居道ヲ將參レル

由ヲ王ニ申ス。王、此ノ猪・羊・鵝・鴨等ノ訴ヘノ状ヲ以

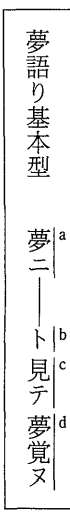
テ居道ニ示シ給。居道ガ云ク、⑧「我レ、致セル所実也、更ニ陳ブル所无シ。但シ、我レ願クハ致セル所ノ猪・羊・鵝・鴨等ノ為ニ四卷ノ金光明経ヲ書写・供養セムト思フ」ト。其ノ時ニ、此ノ致レタル所ノ生類、皆、此ノ功德ニ依テ、各業ニ随テ形ヲ化シツ。王亦、此レヲ聞キ給テ、歎喜シテ居道ヲ生ク路ニ還シ給フ。此レニ依テ、我レ活ル也」ト語ル。

5 其後、心ヲ赦シテ忽ニ四卷ノ金光明経ヲ書写・供養シ奉

リツ。6 此レヲ聞ク人一百余人、致生ヲ断チ肉食ヲ止メタ

リトナム語リ伝ヘタルトヤ。

卷六第四十一語は張ノ居道が死後三日を経て蘇生し、①②の二重引用会話を含む長大な冥途語りをするものである。引用文は文番号4の中に引用される①だけであるが、説話内容も又この①会話文に尽きるもので、典型的なF型である。ところでこの長い冥途語りは説話本文中に、上下に引用動詞を持つ双括形式の直接話法でひかれ、引用動詞語ルを持つが、その会話文を呼び出す語り口も又固定的である。冥途語りには、例文中に **活テ** をつけたような言いまわしが固定している。即ち、冥途は、「……死ヌ。：活テ語テ云クト語ル」という定まった語り口で常に語られるのである。これを基本型としてその変型や応用型があるが、いずれにしても数も少なく変型・応用の幅も小さい。夢語りにおいても同様の様相がみられる。それぞれの基本型とその変型・応用型を示そう。(一) 内に該当する説話番号を例示した。



変型——基本型のa~dの各要素のいずれかを欠くか又は順序が転換する。

変型ア 夢ニト思フ程ニ夢覚ヌ(九三) c 別語

変型イ 夢ニ見ル。夢覚メテ(六一九) b ナシ

変型ウ 夢ニト。夢覚メテ(九三二) c ナシ

変型エ 夢ニト見ケリ。(七二三) d ナシ

変型オ 夢ニト。(六一五) c、d ナシ

応用型—基本型の型に対応せず、別の語り口で夢を語っている。これは少数で次に示す七説話のみである。

応用ア 夢ニ見給クト。(六一三)

応用イ 夢ノ如クニ見レバト。(九二二、同種用例九二五・六一三)

応用ウ 宣ク「夢ノ中ニ」ト宣テ(六六、同種用例九四三)

応用エ 夢ニヲ見ルニ……(六四〇)地の文の形で夢を語る。

冥途語り基本型 死ヌ。…活テ語テ云ク——ト語ル

変型—基本型のa～eの各要素のいずれかを欠くか又は順序が転換したり反復されていたり同義の類語もしくは別表現に置換されたりしている。

変型ア 死ヌ。…冥途ニ至テ…云ク——ト。…活テ此事ヲ語リケリ(六二四)

押殺シツ。…蘇テ…語テ云ク——ト云テ具ニ此事ヲ語ル(七三二)

死ヌ…活テ…具ニ冥途ノ言ヲ伝フ。(九三〇)など

変型イ 死ヌ。…活テ語テ云ク——ト。(七二二) e ナシ

変型ウ 死ヌ。…活テ…語テ云ク——ト。(九三一) d e ナシ

変型エ 絶入ヌ…見レバ——。亦活ヌ。(九三四) c d e ナシ

応用型—冥途を語るといふよりも死後の世界を語るといふ発想で視点の違う表現がなされている。

応用ア 冥途の使いと出会う(使いの言辞により冥途を語る)

…一人ノ人ニ値ヌ。…語テ云ク——ト云畢テ去ヌ。(九二九、九三二)

応用イ 前世語り(死者が転生後の世界を語る)

…女ニ告テ云ク——ト云畢テ走り出ヌ。(九一七、九一九も同様、七三は夢語り)

応用ウ 地獄語り(神と共に地獄に行き実見した語り口になっている)

…僧…神ト共ニ門ヲ出テ……ト。…僧廟令ニ有ツル事ヲ具ニ語ル(七一九)

応用エ 死者と出会う(死者の言辞により冥途を語る)

…道明ハ前ニ死ヌ。其後…失ニシ同法ノ道明立テリ。…「…死テ後、…。(七三二、九一五、二二は夢語り)

夢語り・冥途語り、いずれも応用型は事例が限られているので、全話を示した。どちらの場合も、基本型及びその変型に極端に事例が集中する。変型は基本的には基本型と同型ながら、その要素の一部を欠くものであるから、語りの形式の発想は全く同じである。要素数の多い冥途語りの方により変型が生じやすいのも又当然であろう。表VIにまとめたとおり、基本型とその変型で、夢語りで87パーセント、冥途語りで80パーセントの多きを占めている。この事実、夢を語るにしても冥途を語るにしてもある定まっ

表VI 夢語り・冥途語りの語りの型

巻	型	総数	内 訳		
			基本型	変 型	応用型
夢語り	6	25	13	8	4
	7	15	11	4	3
	9	12	6	3	
	10	3	3		
	計	55	33 (60%)	15 (27%)	7 (13%)
冥途語り	6	13	9	4	
	7	15	3	8	4
	9	16	4	7	5
	10	0			
	計	44	16 (36%)	19 (44%)	9 (20%)

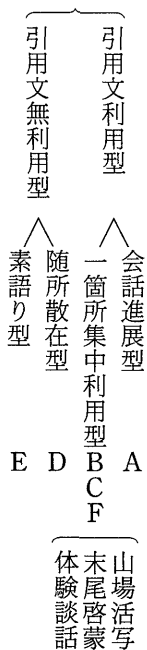
た語り口で述べられることが必要であったことを示している。夢にしても蘇生者の冥界体験にしても、日常性からかけ離れた特異な体験である。そういう体験はある定まった語り口で告げることによって、その特異性の意味をより強く訴えることができよう。『今昔物語集』のような説話集における個々の説話はごく短篇であるから、夢・冥途などの異質の世界への導入に特に筆をさくゆとりはない。定まった語り口でくりかえし語るることによって、あたかもテーマ音楽のように、異常体験への感情移入を容易にするという表現効果をあげている。

震旦部には表IIIでみたとおりE素語り型に強い安定傾向がある。各巻とも一割五分から二割程度有しており、引用文への依存度がそれだけ低いといえる。この事実は大半の説話が漢文の依拠文献を持つことと無関係ではないと思われるが、冒頭で述べたとおり、本稿においてはその点は追求しない。

夢語り・冥途語りを持つ説話は、大むねF体験談話型の引用構造を持ち、長大な会話文を引用する。この会話文中に複数の二重引用会話文がみられその構造は大むねA会話進展型である。即ち、F型はその内部にA型を抱えこんでいるわけであるが、A型こそ引用文利用の語り口の原点である。そう考えると震旦部の引用文の利用の態度・引用構造には明確に分かれる二つのタイプがみられるといえよう。引用文に依存しない説話が相当数みられる一方、引用文を利用する説話は徹底的にその表現に頼っているのである。

五、

以上、震旦部巻六から巻十まで、巻八を欠いて計四巻における引用構造を分析した。先稿天竺論考において発見した五つの型、A会話進展型、B山場活写型、C末尾啓蒙型、D随所散在型、E素語り型の五種に加えて、新たにF体験談話型を見出し、計六種の型を用いて震旦部の各説話の引用構造を整理した。この六種のうち、B型C型及び新たに加えたF型の三種は、いずれも説話中のある特定の箇所引用文を集中して用いて表現効果をあげている型で、引用箇所や引用文数、二重引用の有無、更には引用文の種類や表現効果などの差異によって分類したものである。従って、『今昔物語集』の引用構造の型の種類は、天竺震旦部の考察の範囲では次のようになる。



なおこの点については、本朝仏法・本朝世俗の各部の検討もすませた上で『今昔物語集』全体の引用構造の様相を整理したい。天竺部では、人を語ることから事柄を語ることへ、語りの姿勢が移っていった様相を看取した。震旦部においては、夢を語り冥途を語ることに、即ち日常性を離れた異常体験を語ることに特に集中した傾向がみられ、このことに震旦部の特色が見出される。そこでは、体験の主体はさして問題にされず、体験そのものの特性―何を体験・見聞したのか―が関心の中心である。夢にしろ蘇生体験にしろきわめて個人的なものであるから、語られてはじめて他の人と共有できる。語りがあつてはじめて客観的に存在し得るのが、夢や蘇生者の冥途体験であるが、それだけに、こういう異常体験の語りの形式は固定化・類型化の傾向を持つようである。震旦部の夢語り・冥途語りの引用構造の実態はそれを物語っている。

以上で、震旦部の引用構造の実態を明らかにし、天竺部の引用構造とは差異があることが分った。更に本朝部に考察を進め、『今昔物語集』の引用構造の全容を明らかにするべく、後考を期したい。

(注)

(1) 小峯和明「今昔物語集震旦部の形成と構造」(徳島大学教養部紀要、(人文社会科学) 17、57・3)

他にも多くの論考があるが、小峯氏の前記論文及びその注に詳細に整理紹介されているので、くりかえさない。

(2) 拙稿『今昔物語集』巻二六における会話文の文体―同文的

(今昔物語集震旦部の引用構造(山口))

表 I 引用文の内訳(天竺部)

	引用文数	会話数	心中言	引用文数に 対する心中 言の比率
巻 1	423	376	47	11.11
巻 2	279	247	32	11.14
巻 3	281	255	26	9.25
巻 4	374	310	64	17.11
巻 5	339	268	71	20.94
計	1696	1456	240	14.15

表 III 引用構造の型の巻別比率(天竺部)

	巻 1	巻 2	巻 3	巻 4	巻 5	平均
A 変型	41.66 8.33	2.43 17.07	25.71 8.57	34.14	46.87	29.18 7.02
B 変型	11.11	4.87	20.00	34.14	15.62	17.29
C 変型	13.88	60.97	8.57		9.37	19.45
D 変型	16.66 5.55	4.87 7.31	25.71 8.57	24.39	12.50 9.37	16.75 5.94
E	2.77	2.43	2.85	7.31	6.25	4.32

(3) 同話との比較による考察―(長崎大学教育学部人文科学研究報告・第三十一号、57・3)
先稿天竺論考においては、すべて、口頭で発話されたものは①会話文に、心中で想起されたものは②心中言に分類した。

(4) 先稿天竺論考(拙稿「今昔物語集天竺部の引用構造」長崎大学教育学部人文科学研究報告・第三十二号、58・3) 16頁、表 I。

(5) 先稿天竺論考 25頁、表 III
(6) 先稿天竺論考 26頁、図 A

図A 引用率巻別分布図(天竺部)

表中の・は各話の引用率を示す。

